

関わり合い、助け合いながら暮らしたい

出口雅子 / てぐち・まさこ
ピナツボ復興むさしのネット (ピナツ)



今 から24年前、フィリピン留学中に住んでいた町は、帰宅途中の私に、近所のおじさんやおばさんが「おかえり、遅かったね」「お、新しい髪形いいね」などと声をかけてくれる賑やかな町だった。路地裏で遊ぶ子どもたちは年上のお兄さん、お姉さんに見守られながら育っていた。外国人の私も見守られている安心感を持って過ごすことができた。新興住宅地で、転勤族の父と専業主婦の母の核家族家庭に育った私には、子どもも大人もごちゃごちゃと関わり合いながら生活しているこの環境がうらやましかった。

「ピナツボ復興むさしのネット(ピナツ)」が入っている「すぺーすはちのこ」は、まさにそういう場所だ。同じ敷地内に保育園と学童保育があり、0歳から小学6年生の子どもたちが一緒に過ごし、多様な年代のスタッフやボランティアが「見る・待つ」保育を実践している。親やスタッフの自主活動も応援していて、ピナツボはそのひとつとして、1991年、フィリピンのピナツボ火山が大噴火を起こした際に発足した。保育園

のメンバーが日本ネグロス・キャンペーン委員会(JCNC)のツアーでピナツボを訪問したのがきっかけだった。

ピナツボはその後、地域の在住外国人たちとも関わろうと日本語教室を開設。スタッフも学習者も子育て中の人が多い水曜クラスは、日本語学習だけでなく様々な生活相談・子育て相談の場もある。日本人男性と結婚したフィリピン人女性の中には日本語ができないことで夫や子どもとの関係に自信を失っていたり、一人きりの子育てに孤独感を感じている人もいる。ピナツボではフィリピン人ママたちと一緒に、国際理解教育の教材づくりや子どもの学習支援教室、外国人のための小学校説明会などに取り組んできた。フィリピン人ママたちは講師や通訳として活躍することで少しずつ自信と元氣を取り戻していく。

ピナツボは小さな「場」ではないが、日々の暮らしのなかで、少しでも誰かの役に立ったり、気軽に助けってもらえる場を誰もが持っている社会になるといいな、と思う。

「ポコポコ」は「サンゴ礁の満潮」をイメージしています。潮が満ちていくにつれ、サンゴ礁のあちこちに「ポコ」(水たまり)が現れて、ポコポコ同士がつながり始め、いつのまにか一面海になるというイメージです。アジアの各地域で「ポコ」が生まれ、気がつけばつながっているような活動をしていきたいという思いがこめられています。

CONTENTS ■ HALINA 17 2012.08.01

02	Relay Essay ポコポコ 関わり合い、助け合いながら暮らしたい◎出口雅子
03	【特集】食卓から反撃しよう! — 世界に、そして暮らしのすみずみに浸透する遺伝子組み換え食品 遺伝子組み換え問題、世界は今◎印鑰智哉 【フィリピン】科学者と農民の抗議 vs. 遺伝子組み換え作物マニュアル ◎イナ アレコ R. シルベリオ 【日本】忍び寄る遺伝子組み換え食品◎西分千秋
8	【Topics】 バナナ募金支援者の皆様へ◎松崎恵子 ビルマ—新政府発足と民主化の行方◎秋元由紀
10	【Column】 水俣と日本の今◎ お茶に寄り添う◎原田利恵 マイストーリー in ジャパン◎ 【インドネシア】メタ・スカル・ブジ・アストゥティさん 仙人の雑読・濫読◎ 想像力が問われている◎秋山真兄 Have you ever seen the Cinema?◎ 『クロッカーズ』◎重政栄一郎
12	撮っておきアジア◎ カンボジア、プノンペン市内◎大藪明恵
13	APLA生活◎ 有機人参使用 まるごとジュース◎吉澤真満子
14	【Voice from APLA partners】 【ネグロスより】カネシゲファーム・ルーラルキャンパス(KF-RC) 直売所を開店!
15	事務局だより

表紙のことば

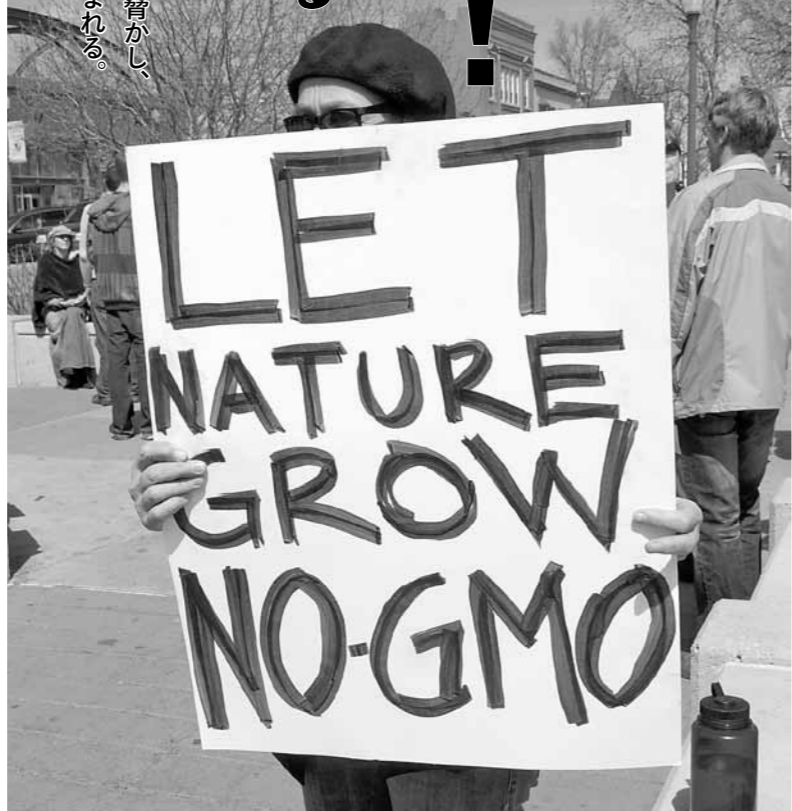
この生地はタイの山地民ラフ族の模様である。ラフ族は、中国、ビルマ、ラオス、ベトナム、タイの国境を横断して居住している少数民族。タイには約10万2571人(2002年)が暮らしている。ラフとは「勇気のある人」という意味だ。綺麗な民族の刺繍の伝統を持つタイの山地民の村に市場経済が浸透するようになって、娘たちが商品として貨幣と交換されるケースが増えていった。娘を売る代わりに貨幣を得る手段として、NGOなどが民族の模様を織り込んだバックや小物をフェアトレード商品として販売し、刺繍をする村の女性たちの現金収入につなげている。この美しい生地には、どのような思いがこめられているのだろうか……。 (堀芳枝)

特集

食卓から反撃しよう!

世界に、そして暮らしのすみずみに浸透する遺伝子組み換え食品

遺伝子組み換え(GM)作物・食品の広がりが新しい段階に入った。中南米に、アフリカに、アジアに広がり、地域の生態系と人びとの生命を脅かし、一方では微量の食品添付物の形をとって、知らないうちに人体に取り込まれる。そんなGMをめぐる状況を追い、どう向かい撃つかを考えた。(編集部)



アメリカ・コロラド州での反対デモ「自然には遺伝子組み換えでない作物を育ててもらおう」 by brdavid (www.flickr.com/photos/lightweaver2/)

遺伝子組み換え問題、世界は今

印鑰智哉 / いんやく・ともや
株式会社オルター・トレードジャパン デジタル・メディア担当

枯葉剤がふたたび大地に

アルゼンチンでショッキングなテレビ番組が報道された。ベトナム

ム戦争の枯れ葉剤を思わせるような農業被害が報告されたのだ。ガン、白血病、糖尿病、腎炎、出生異常、皮膚病、呼吸器障害、その広がりはアルゼンチン社会に大きなショックを与えた。この現象は遺伝子組み換え大豆の耕作が急速に増え、モンサントの開発した農

薬ラウンドアップの使用が激増したことによって引き起こされた。広大な地域で有害な成分を含む農薬が空中散布され、住民が農薬を浴び、死亡したり、深刻な病に陥る事件が続出した。大豆生産の拡大は、同時に小農民・先住民の土地からの排除と農地の少数大地主へのさらなる集中という事態も生

きわめて短期間に南米における大豆生産のほとんどが遺伝子組み換えとなり、アルゼンチンの98%、ブラジルの85%がすでに遺伝子組み換えになっているとされる。広大な農地は巨大な機械で耕作され、農薬は空中散布されるか、巨大な噴霧器で撒かれる。大量に噴霧される農薬の量は年々増えている。農薬ラウンドアップが効かなくな

ってきたのだ。そして今、導入が検討されているのが、ベトナム戦争で撒かれた枯れ葉剤の成分DDEに耐性のある遺伝子組み換え作物だ。多大な環境被害を引き起こした枯れ葉剤が広大な大陸で撒かれようとしている。

安全神話は壊れた

遺伝子組み換え作物による健康

被害は耕作地にとどまらない。遺伝子組み換え農産物は従来の農産物と実質的同質であり、長期間のモニターは不要であると遺伝子組み換え企業は繰り返してきた。しかし、その安全神話はもはや世界で信頼を失いつつある。

害虫が食べると即死するBt毒素を合成するように遺伝子組み換えされたトウモロコシを飼料として

た家畜の肉を食べ

た93%の妊婦の血

液中からこのBt

毒素が発見され、

胎児にも80%の割合で発見されると、

カナダの研究機関

が報告した。

遺伝子組み換え

食品を体内に取り

込むと、それは単

にタンパクや栄養

素として取り込ま

れるだけでなく、

組み替えられたμ

RNA自体を取り

込んでしまう、と

いう研究結果も発

表された。遺伝子

組み換え食品を食

遺伝子組み換えとうもろこし (カナダ) by Peter Blanchard (www.flickr.com/photos/peterblanchard/)



べるといことは組み換えられた遺伝子を情報として体内に取り組むことを意味している。その結果、異物を判別し、人体に悪影響を与えるものを排除する体内の免疫システムが攪乱させられる。その障害は血液を通じて、体内に広がり、ガン、白血病、神経系、アレルギーなど免疫系の病気を引き起こす。免疫を形成する上でもっともデリケートな胎児や新生児に多大な影響を与える懸念がある。

世界で広がる反対運動

日本のマスコミはほとんど報じないが、世界では遺伝子組み換えに対して激しい反対運動が行われている。

ヨーロッパでは、遺伝子組み換

方がGMフリーゾーンとなった。

ラテンアメリカでは、昨年ペル

ーが今後10年間の遺伝子組み換え

の禁止を打ち出し、ベネズエラも

ボリビアも遺伝子組み換えへの反

対を表明している。アフリカには

米国際開発庁(USAID)が食料

援助と引き替えに遺伝子組み換え

作物の承認を各国に迫っているが、

食料援助を断つても遺伝子組み換

え作物を認めない国が続出するな

ど、抵抗は強い。

とりわけ重要なのがこの遺伝子

組み換えの推進国である米国での

遺伝子組み換え反対運動の進展で

ある。昨年来、20州で遺伝子組み

換え食品表示を求める法案が提出

され、カリフォルニア州はついに

住民投票にかけるために必要な1

00万人の署名を短期間に集め、

米国では画期的な遺伝子組み換え

食品表示の成立にこぎつけようと

している。

しかし、日本のマスコミは遺伝

子組み換えの問題についてはほとん

ど報じてこなかった。そして日本

政府は遺伝子組み換え企業の要請

に実に従順にしたがって、ヨーロ

ッパではほとんどの国で禁止され

ている遺伝子組み換え作物もすべ

て承認してしまっている。しかし、

日本には世界に類を見ない生産者

と消費者の強い関係がある。これ

レポート Report

フィリピン / Philippines

科学者と農民の抗議VS. 遺伝子組み換え作物マニニユアル

イナアレコ R. シルベリオ / Ina Aleco R. Silverio
Balata.comライター

科学者と農地改革擁護者たちは、アキノ政権による遺伝子組み換え作物の導入への深い関与に抗議し、国家バイオセーフティ委員会(NCBP)によって現在協議がすすんでいる『バイオセーフティ意思決定プロセスに関するマニニユアル』への反対を示すため、農業省前でピケを張った。同マニニユアル

は、フィリピンでゆくゆく商業化される遺伝子組み換え作物についての研究・試験に関する詳細を定めたものである。この行動を率いているRESISTI: Agrochemical TNCS Networkは、『バイオセーフティは、政府の政策上まったく重視されていない。政府は、この国により多くの遺伝子組み換え作物を導入す

ることを推進しているだけだ」と述べる。農民、科学者、環境活動家や開発に従事する人びとからなる同グループは、現在進められている協議が、包括的な安全性や環境・社会経済的な影響の研究などが全くなされぬままに遺伝子組み換え作物をフィリピンに導入できるとような政策の制度化を加速すると強く主張する。

「この問題により、人びとの健康や環境が危機にさらされる。提案者・賛成側が遺伝子組み換え作物がもつ安全性と環境問題に関する疑問に責任をもって答えられない限り、フィリピンへの導入が許されるべきではありません」と述べるのは、RESISTIの共同議長をつとめるチト・メディナ博士だ。「小農民は、伝統的な種を保持することで生計を維持できている。遺伝子組み換え作物の必要性は皆無だ」とも述べる。

KMPの副事務局長でありRESISTIの共同議長でもあるウィルフレド・マルベラ氏は、提案された方針は、遺伝子組み換え推進派が「企業秘密情報」の名のもと、事業に関する重要な情報を隠し、遺伝子組み換え作物や使用製品の大量な導入にとって好ましい条件をつくりだすことを許す、と述べる。「最終的には、無数の農民がこの政策の負の影響に苦しめ



アルゼンチンの大豆畑へのモンサントの農薬空中噴霧。(『http://youtu.be/eHHS45AJsol』より)



大豆=死と餓え。(『http://www.youtube.com/watch?v=loz18v0sFZY』より)

【表1】GM食品を使って作られた可能性のあるもの

GM食品	用途 (GM食品を使って作られた可能性のあるもの)
トウモロコシ	飼料、食用油、コーンスターチ、デンプン、コーンフレーク、ブドウ糖、果糖、異性化液糖、水飴、グルタミン酸ナトリウム、醸造用アルコール、ビタミンC、他
大豆	飼料、食用油、豆腐、納豆、味噌、醤油、植物性たんぱく、たん白加水分解物、レシチン、乳化剤、ビタミンE、他
綿	飼料、食用油、他
ナタネ	飼料、食用油、ビタミンE、他
パパイヤ	青果、ドライフルーツ、ほか

【表2】日本のGM食品表示制度

	義務対象品目	それ以外の品目 (任意表示)
定義	加工後もDNAまたは由来たんぱく質が残っている食品で、GM作物由来食品の重量比が5%以上かつ上位3位	加工後にDNAまたは由来たんぱく質が残っていない食品。加工後にそれが残っていてもGM作物由来食品の重量比が5%未満または上位4位以下の場合。
主な品目	豆腐、納豆、味噌、コーンスナック菓子など、ほんのわずか33品目	食用油、醤油、さまざまな加工副原料(糖類、たんぱく質類、油脂類など)など
GMの表示方法	「遺伝子組み換え」または「遺伝子組み換え不分別」	表示なし(※)
非GMの表示方法	表示なし(※)	「遺伝子組み換えでない」

(※) 以上のように「表示なし」となっている。

いる通り、米国のスーパーで売られている加工食品の70%に遺伝子組み換え(GM)食品が何らかの形で入っているとされていますが、表示はされていません。そのため消費者は知らず知らずのうちに食べてしまっています。これは米国の話ですが、日本でも同じ現状だといえます。

遺伝子組み換え作物食品の現状

日本では1996年にGM作物が食品として認可されました。日本で安全性が確認され、販売・流通が認められているのは、2012年3月現在、大豆、トウモロコシ、ジャガイモ、綿、ナタネ、アルファルファ、テンサイ、パパイヤの8作物(169品種)、キモシン、α-アマミラーゼ、リパーゼ、プルランナーゼ、リボフラビン、グルコアミラーゼ、α-グルコシルトランスフェラーゼという添加物7種類(15品目)です。

加工食品に入っている遺伝子組み換え食品

食用油(大豆、ナタネ、コーン)、豆腐、味噌、醤油、マヨネーズなどの原

料はこれらGM作物を大量に輸入しています。主に家畜の飼料と食用油などの加工食品の原材料ですが、食品添加物、医薬品など、様々な形を変えて使われています。

世界的にはGM作物の栽培は増えています。2011年の作付け面積は、大豆7540万ha、トウモロコシ5100万ha、綿2470万ha、ナタネ820万ha、合計1億6000万ha(1.6億ha)と推定されており、日本の国土(3780万ha)の5倍の広さに達しています。

私たちが知らずに食べているGM食品、食品表示のせつぷ。

多くの消費者がGM食品に不安をもっていますが、日本のGM食品表示制度ではGM食品が使われているのかわからないのが分らず、知らず知らずのうちに食べてしまっています。

ハンバーグやフライドチキンなどの材料になる肉や卵などのもになる家畜の飼料には、GM作物が多く使われていますが、飼料の表示義務はなく表示されていません。ナタネについても、日本の自給率は0.1%なので、食用油の原材料となるナタネはほとんどをGM栽培国のアメリカ、カナダ、オーストラリアから輸入しています。食用油にも表示義務はありません。【表2】

〔注〕国際アグリバイオ事業団

さらに、RESEISTネットワークは、2013年にフィリピンが遺伝子組み換え米・ゴールデンライスの市場としての「発射台」にされる計画にも反対している。メディアは、この遺伝子組み換え米の導入は国際的な食糧安全保障と栄養失調削減を後押しすると伝えている。また、推進派は、ゴールデンライスの商業化は、ビタミンA不足による幼児・妊産婦・母親の死亡率を全国的に減少させる策

2013年、フィリピンはゴールデンライスの巨大市場に

となる主張するのだ。科学者グループによれば、バイオ技術の専門家がゴールデンライスの安全性を確認したとしても、それに含まれるベータカロチンの有用性に関しては、いまだに疑問が残っており、こうした遺伝子組み換え米が大量市場に食い込むことは、人びとを危険にさらすことになるという。

前述のメディアナ博士は、「ゴールデンライスが、ビタミンA不足による栄養失調障害や失明を解決するという科学的根拠は存在していない。遺伝子操作技術を取り入れたアグロケミカル企業と彼らと結託した科学者による宣伝にすぎないのだ。ゴールデンライスの開発と販売促進は、そもそもの栄養失調の主要原因である生物や食の多様化を悪化させる産業モデルのよい例だ」と語る。「フィリピンの農業当局は、自然由来のベータカロチンの摂取によるビタミンA不足の解消を推進すべきだ。植物や家畜からの有機堆肥はより安全で、かつ土壌や米そのものを豊かにする。また、我々は、赤米マンゴー、在来種トウモロコシ、パパイヤ、人参、キャベツ、ほう

れん草、葉野菜、サツマイモなどからベータカロチンを摂取できるのだ」。同グループはまた、ゴールデンライスの圃場栽培実験が環境へ悪影響を及ぼすことへの懸念を表明している。ゴールデンライスが、現存の米を(異花受粉により)汚染する可能性があるからだ。メディアナ博士は、在来種のほうが環境と気候に適しており、より多くの収穫を農民に保証する。一方でゴールデンライスの開発による成果は、種の特許を通じた多国籍アグリビジネス企業による農業と食糧の支配を正当化するだけだ。「栄養失調や飢餓の問題は、土地へのアクセスが困難なことや極限的な貧困によるものである。多国籍企

忍び寄る遺伝子組み換え食品

西分千秋 / にしぶん・ちあき

遺伝子組み換え食品いらない! キャンペーン

最近、米国の食品産業の内幕を撮ったドキュメンタリー映画『フ

ード・インク』を見る機会がありました。この映画でも指摘されて

※この記事は、以下のサイトに掲載されている原稿を編集部が要約したものです。
http://bulatlat.com/main/2012/01/31/scientists-farmers-protest-vs-manual-on-gmos/

〔注〕ウイキペディアによれば、バイオセーフティとは、生態学、化学、農業、薬学、生物学などの各分野において、人間の生命と生態に深刻な影響を及ぼすことを防ぐことと定義される。

〔注〕Kilusang Magbubukid ng Pilipinas: フィリピン農民運動。土地なし農民、小規模農家、農園労働者、農村の青年、農村女性たちによる民主的な過激運動体。15区域、65州の約200万人の農民に影響を及ぼす。

バナナ募金支援者の皆様へ

松崎恵子 / まつざき・けいこ
ビッグキッズプロジェクト

私

震災を機に、ビッグキッズプロジェクト(キッズ)というグループで、福島の子どもの支援活動をしています。もともとキッズは国際結婚をし、オーストラリアで生活する福島県出身の親と子どもを支援する団体です。震災後、オーストラリアのメンバーが故郷を思い、手作り品のバザーや募金活動で集めた支援金を継続的に送ってくれています。福島県から避難する子どもたちの支援金、また福島市内の保育園や幼稚園の室内遊具の設備費として活用しています。支援金はどこでどのように使われるのか、それが重要です。本来に必要なものを必要な場所に届ける。という思いで支援団体と園を繋ぐサポーターとしての活動をスタートしました。私たちの役目は、園のニーズを確認したうえで物資に変えてお届けし、その報告を支援団体に返すことです。

『バナナ募金』を子どもたちへ

そんななか、APLAから『バナナ募金』のご案内をいただきました。本当に嬉しいお話でした。比較的放射線量の高い地域で、給食提供できる施設を優先し、福島市内16カ所へ案内しました。どの施設も、定期配送に驚かれます。限られた予算内で産地を厳選し、安心・安全な食事を子どもたちに提供したい。皆同じ気持ちです。お声がけした全ての園が申し込みたいとお返事でした。バナナは子どもたちが大好きな食べもののひとつです。そのまま食べてももちろん美味しいですが、バナナケーキやきなこバナナなど、子どもたちが大好きなおやつにも変身します。各家庭でも食材選びには敏感で、子育て世代の保護者は他県産・外国産を買っている姿が目につきます。免疫力を高める食材などを意識的に料理に取り入れる家庭も多いでしょう。

福島市内では昨年末から定期的に給食の放射性物質の検査が始まりました。今年4月からは公立小学校や認可保育園で、毎日検査が実施されています。遅すぎるスタートですが、保護者の安心を高める食材などを意識的に料理に取り入れる家庭も多いでしょう。

心を得るため、子どもたちの安全を保障するためには必要なことです。悩み、迷いながらも今を生きる

私の子どもを通う小学校では2時間以内だった外での活動制限が、2011年10月に実施された除染作業を受け、今年4月から3時間以内に緩和されました。3歳の息子は5月に震災後初めて園での戸外遊びを行いました。15分だけですが、子どもたちは大満足。どんなに屋内で身体を動かしても、風や太陽、木々の匂いを感じることはできません。これがあるべき姿なのですね。私も二人の子どもを持つ親ですが、避難という選択をしませんでした。この判断を非難する人もいますし、将来子どもたちに責められる日が来るかもしれない。職場・家族・地域……全ての理解を得て避難するのは、とても難しいことです。夫を残し、子どもと避難した友人が言っていました。「子どものストレスが分かる。身体がいくつ健康でも心の病気がかかってしまつたら避難した意味がない」と。正解はないと私は思っています。悩み、迷いながらも、今自分ができることをして、前へ進むしかないのだと。これから長期に渡り、子どもも大人も心のケアが必要になってくるでしょう。私たちも



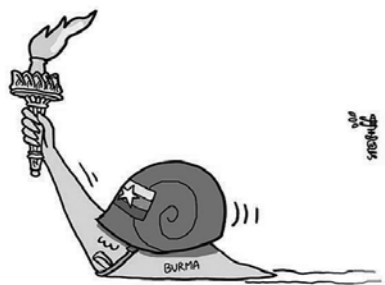
届いたバナナでチョコバナナパーティー! みんな盛り上がりっていました。(福島市・東浜保育所)

すぎない」などと批判していた政府に正統性を与える結果になった。新政府の下、多くの政治囚が解放され、検閲制度が部分廃止されるなど情報統制も緩み、言論の自由も拡大した。しかし新政府は、真の民主化をめざしているのでも、長年改革を求めてきた民主化運動勢力の要求に応えたのでもない。単に、軍政時代のように国民の不满や反抗を武力で抑えるよりも、国民や国際社会に「民主化する姿勢」を強調する方が実益があると判断したのだろう。

そんな真意を表してか、改革と言われる動きの多くは運用上の措置や印象操作によるもので、制度の転換によるものではない。たとえば、多くの政治囚を投獄する根拠にされた法律は残っ

民主化の鍵を握る国軍

「軍による民主化はかたつむりの歩み?」民主化運動系の雑誌『イラワディ』に掲載された風刺画。軍政時代をよく知る民主化運動家の多くは、最近の「民主化改革」の本質を見抜いている。



「軍による民主化はかたつむりの歩み?」民主化運動系の雑誌『イラワディ』に掲載された風刺画。軍政時代をよく知る民主化運動家の多くは、最近の「民主化改革」の本質を見抜いている。

常アンテナをはって情報を判断し、サポートを続けたいと思っています。子どもたちが犠牲になったのは事実ですが、子どもたちは与えられた環境の中で、学び・遊び・今を楽しんでいます。その姿が大人たちの原動力にもなっています。震災が教えてくれました。多くの人たちに支えられ、愛情をいっぱい受け、感謝の気持ちを感じられる。これは本当に幸せなことだ。きつとこの経験も子どもたちの貴重な財産になると信じています。

バナナ募金へご支援をいただいている皆様、本当にありがとうございます。綺麗な福島、子どもたちの笑顔がある街を一日も早く取り戻すことが、皆様への恩返しだと思っています。

たまたまだし、ビルマ各地の刑務所にまだ数百人の政治囚がいる。また新政府は、一部の少数民族武装勢力との停戦協定締結を強調するが、北部のカチン州では、新政府発足後の2011年6月、国軍とカチン民族武装勢力との内戦が十数年ぶりに再開、1年たった今も止まっていない。この影響で、7万人以上のカチン住民が戦禍を逃れるために地元を離れ、中国国境近くで不自由な避難生活を送っている。またタイ西部にあるキャンプにも、国軍による砲撃や焼き討ちなどを逃れてビルマを出てきた難民約14万人が暮らすのが、元々住んでいた地域の非軍事化や地雷除去が進まず、帰国のめどは立たない。さらに今年6月には西部アラカン州で信教に基づく住民同士の衝突が起き、死傷者が出たほか、数万人のムスリム住民が避難民となっている。

ビルマの政治・経済・社会的な仕組みの大部分は国軍に有利なままであり、今後それが変わっていくかは国軍が支える新政府次第である。アウンサンサーチー氏も6月初め、バンコクでの演説で「ビルマで改革が続くかどうかは国軍の協力の有無にかかっている」と述べた。私たちはブームに惑わされず、ビルマで制度や構造面での民主化が進んでいくかに注目するべきだろう。

ビルマ―新政府発足と民主化の行方

秋元由紀 / あきもと・ゆき

ビルマ情報ネットワークディレクター、上智大学非常勤講師

2

011年3月の新政府発足から1年余り。半世紀以上も軍事政権下にあったビルマ(ミャンマー)の変わりぶりが、「急速な民主化」などとしてメディアで頻繁に扱われている。ビルマといえば厳しい情報統制や劣悪な人権状況といった問題が取りあげられるのが常だったのに、最近ではテレビでも、以前のように深刻なドキュメンタリー番組枠ではなく、人気のクイズ番組に出てきたりしている。欧米政府は経済制裁の大部分を解除するなどし、日本政府も政府開発援助(ODA)の本格拡大を決定した。未開拓の市場を求めて投資を検討する企業も多い。ちょっとしたミャンマー・ブームが起きている感だ。

新政府の実態

しかしビルマの統治体制をよく見ると、実はそれほど民主的ではない。新政府は表面上、文民政府だが、元陸軍大将である大統領のほか、大臣30人のうち26人が軍出身者だ。国会でも、上

下院の8割以上を軍人か軍出身者が占める。これは議席の25%が選挙対象外の軍人枠であるうえ、不正まみれだった2010年の総選挙で前軍事政権の翼賛政党が圧倒的勝利を収めたからだ。国軍が統治の要所を押さえており、そうした構造自体が憲法によって保障されている。その憲法を改正するのも、国軍の合意なしでは不可能に近い。

国軍が権力を握ったままなのにビルマ政府が国際社会に認められることになったのは、民主化運動指導者アウンサンサーチー氏が4月に補欠選挙に出馬し、下院議員になったことが大きい。氏の率いる政党、国民民主連盟(NLD)は、2004年に現行憲法の制定会議をボイコットして以来、軍政が主導する政治プロセスには一切参加せず、現政府を生み出した2010年の総選挙にも「手続きが不公平だ」として候補者を出さなかった。そんなNLDが立場を一転させて国政への参加を決めたことで、つい1年前にはNLD自身が「見せかけの文民政府に

03

仙人の雑読・濫読 05

秋山眞兄 / あきやま・なおえ
APLA共同代表



『もの食う人びと』 辺見庸
(角川書店)

「ダツカで残飯売りの飯を食らい、チエルノブイリで放射能汚染スープを飲んだりしていますが、ホテルではちゃんとした食事をしていて思いますが。その落差をどう感じていますか？」

1997年、勤務校で『もの食う人びと』(1997年、角川文庫)の著者である辺見庸さんを招いて「食べる」と「想像力」という講演をしてもらった。飽食の日常のなかでは見たり聞いたりすることはない世界の現実を『もの食う人びと』を通して生徒に知ってもらいたい。そのことだけを書いて手紙を出したところ、快く引き受けてくれた。その質疑応答の冒頭に、中学3年生が辺見さんにした質問だ。見事な想像力である。

「ウーン……つくづく記者は、いや自分はハイエナだと思わされますね」。これが辺見さんの答えであった。私が企画した講演会で最も深みと味わいのある講演会となったし、辺見さんを本物だと思った。その晩、彼

想像力が問われている

は講演料を全て使おうと、明け方まで一緒に呑みまわった。その後、日本ネグロス・キャンペーン委員会(JCNC)関係の地方での講演を気軽に引き受けてくれたが、それ以降、接することはなくなった。しかし、彼の言説や著作はいつも気になり、3・11が起きて少し経った時、石巻出身の彼はどう考えているのかと思った。「3・11が、言葉と実体のつながりを破断したのではなく、3・11のおかげで、もともとあった言葉と実体の断層が証されたのです」『瓦礫の中から言葉を』2012年、NHK出版新書。

3・11以降、報道・解説・評論・詩などを雑誌・濫読しているが、この事態をどのように受け止めるのか。やはり辺見さんのものはズーンとくる。このところ月数回、福島放射能汚染地域を訪ねているが、原発爆発直後に福島在住の詩人・和合亮一さんが怒りに満ちてツイッターで発した「放射能が降っています。静かな夜です」(詩の巻、2011年、徳間書店)に込められた思いをその都度想起し、「放射能が降っています。静かな毎日です」という日常を生きている人のことを想像せざるを得ない。鷺田清一×赤坂憲雄『東北の震災と想像力』(2012年、講談社)も、私たちに想像力があるのかと問うている。

01

水俣と日本の今 その5

原田利恵 / はらだ・りえ
環境省国立水俣病総合研究センター 研究員



開墾時代の様子(松本さん提供)

水俣病は海の汚染によって引き起こされた有機水銀中毒ですが、山間部の農作物まで売れなくなるといって「風評被害」を経験しました。しかし、今や水俣産のお茶はブランドとして確立しつつあります。今回は、海外進出を始めた桜野園4代目、松本和也さん(1968年生)をご紹介します。

薄原集落にある桜野園は1927(昭和2年)、松本さんの曾祖父が開墾しました。命名したのは、戦前・戦後と日本の言論界に影響を与えた水俣出身の徳富蘇峰です。松本家の親戚筋で、居間には蘇峰の筆による『桜野園』の書が掲げられています。

松本さんは、青森県弘前市の木村秋則さんが手がける「奇跡のリンゴ」に触発されて、8年前から自然栽培に取り組んでいます。農業はもちろ

飛躍する水俣茶

ん、一切の肥料を使用せず、除草や耕起を行わない究極の農法です。もともと国産にこだわった菜種油の絞り粕の肥料を使っていたが、「水俣だからこそ」もっと自然に近い栽培法に取り組んでみようと思ったのがきっかけだそうです。

曾祖父が種から一つひとつ育てた在来種の一茶葉を『むかし茶』というブランドで出していますが、自然栽培の賜物か、その野趣あふれる力強い味と香りの緑茶は、日本茶の美味しさに新たに開眼させられる味です。

桜野園は現在、英国ロンドンのポストカードティーズという専門店の紅茶と釜煎り茶を卸しています。紅茶はインド産に限ると言っていたインド人の客が「美味しいのはインド産だけではなかった」と驚きと称賛の声を寄せたそうです。店主のティムさんは「今後、日本は紅茶の一大産地になっていくだろう」と予言しています。ドイツにも煎茶を卸して、徐々に欧州で販売ルートを開拓していく予定です。

また、松本さんは自園ブランドだけではなく、農協全体で『みなまた茶』というブランドを立ち上げ、水俣地域全体のブランド力強化にも取り組んでいます。

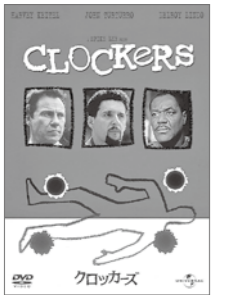
04

Have you ever seen the Cinema? あの映画を見たかい?

11

『クロッカーズ』(1995年、米国)
【監督】スパイク・リー 【出演】メキー・ファイファー、ハーベイ・カイトル

重政栄一郎 / しげまさ・えいいちろう
エディトリアル・デザイナー



ユニバーサル映画100周年企画シネマコレクション
『クロッカーズ』
発売元: ジェネオン・ユニバーサル・エンターテイメント
価格: 1,500円(税込)

冒頭のクレジット・シーン。出演者や制作スタッフの名前が表示される背景に数々の死体写真が映し出される。路上に打ち捨てられ、無惨な姿を晒すそれらの死体には「穴」が空いている。射殺されたのである。次々に現れる哀れな死体の数々は、この街で銃が使われた殺人事件が決して珍しいものではないことを示す。

次にカメラが捉えるのは凄惨な殺人事件の現場を取り巻き、死体を眺める子どもたち。ここは彼女たちの日常の場だ。その子どもたちはここで生まれ、ここで大人へ成長する。舞台はニューヨーク、ブルックリン。共同住宅が建ち並ぶその街に住まうのは低所得層の黒人。主役は公園で麻薬を売る末端の売人(「クロッカー」の若者。彼もまたこの街に暮らし、育った黒人だ。元締めをたまし、売上の一部をちよるまかしていた一人のクロッカーが射殺された事件の真相解明を軸に物語は展開する……。

それでも真つ当に生きようとする人たち……

この街は麻薬に蝕まれ、銃がはびこる。住人の日常は暴力に囲まれている。差別があり、無知があり、エイズがあり、汚職がある。そして何よりも貧困(「格差」)がある。引きも切らずに続く黒人住民同士の殺人事件にうんざりした白人刑事の一人がつぶやく。「こんな地区つぶしてしまえ、殺し合って全滅だ」。ここには現代の米国社会が抱える深刻な問題が根深く巣く、顕在化している。

この街でもともにも生きること、子どもをまともにも育てることは、いかに困難なことだろうか……。日常が子どもたちの脳裏に暴力を植えつけ、犯罪が再生産される。住民たちは互いの足を引っ張り合い、真面目に学び、誠実に働く意志と気力は挫かれ、そして子どもを暴力や犯罪、そしてこの街の風潮から守り、真つ当に育てようとする母親がいる。家族とともにこの街を抜け出し、まともな生活を手に入れるために懸命に働く父親がいる。そのような親や子どもを見守り、支える人も……。劇中、物語の展開とは関係がないところで銃を使った犯罪を嘆き、銃所持の規制を主張する看板が画面の端々に何度も登場する。制作者のメッセージが静かに込められている。

02

マイストーリー ジャパン 日本に住む在日外国人たち 【第五回】



東京都内のカフェにて。

インドネシアメタ・スカル・プジャストゥティさん / Meta Sakal Puj Astuti
聞き手: 野川未央 (APLA 事務局)

都内の大学の博士課程に在籍するメタさんは、4年ほど前から2人の子どもと留学生活を送っている。

彼女の研究テーマは「戦前のインドネシアにおける日本人移民」について。ピンとこない人も多いと思うが、明治以降に出稼ぎのために東南アジアに渡った日本人は少なくない。現地の言葉を学び、その地に根をおろして、小規模の行商から始め、「トコ・ジャパン(『日本の店』)と呼ばれる店舗を構えるまでになった人びとがいる。そういう市井の人びとのことを研究するメタさんは、「太平洋戦争時に日本がインドネシアをはじめとするアジア諸国を侵略・占領したという事実は決して消えることではないけれど、インドネシアと日本の関係性を語るときに、戦争という

インドネシアメタ・スカル・プジャストゥティさん

国と国の歴史だけを取り上げるのでは不十分」と話す。

今では経済的に急成長を遂げている新興国として注目されているインドネシア(その一方で国内格差は広がり続けている)。そのため、日本に暮らしている目に付くニュースは、経済やビジネスのことばかり。そういう状況を少しでも変えるため、小さくても石を投じることが研究をすすめる動機のひとつだ。

東日本大震災後、メタさんも子どもたちを抱えて不安な月日を過ごした。しかし、結果的に現在も東京に暮らしつつづけている。「次いつ大きな地震があるかは心配。でもインドネシアも日本と同じ地震多発地域だし、どこに暮らしてもいつ何が起きるかわからない」とメタさんは明るく笑う。先日、渋谷で反原発デモと遭遇したときに、音楽を流し、仮装をした人がたくさんいて、おもしろいと思ったそうだ。「インドネシアでは、福島原発事故のことはすでに終わったもの、という認識が広まっている。こうしたデモの様子だけでもインドネシアの人たちにもっと知らせられたらいい」というコメントからも国と国の枠にとらわれない、「ふつうの」人同士のつながりを重視している姿勢が見てとれた。

今回のお題 有機人参使用 まるごとジュース

レポーター
吉澤真満子 / よしざわ・まみこ
APLA事務局長



2011年の11月からAPLAでも販売を始めた『まるごとジュース』。3・11後に出会った、福島県で有機農業を営む二本松有機農業研究会の皆さんがつくっているジュースです。福島の農家の皆さんにAPLAは何ができるか……、そんなことを話していたときに「にんじんのジュースがあります。これを売ってくれませんか」と、言われました。原発事故後、福島に残って農業を続けると決めた皆さんですが、やはりモノが売れるという経済的基

盤がなければ、農業も生活も続けられない。そんな切実な思いが伝わってきました。実際にこのジュースを放射能測定したところ、最初の製造ロットで1ベクレル、二回目のロットで不検出となっていました。検査出限界1ベクレル/kgで検査。APLAの理事会では、このジュースをどう取り扱うかを協議し、条件として、世界でも厳しいドイツの放射線防護令の子どもに適合されている数値を取り、4ベクレル以下のものであれば販売することにしました。

奥が深いにんじんづくり
この『まるごとジュース』、震災後に開発された商品ではありません。2年前からつくり始め、人気商品だったそうです。「きっかけは、にんじんが多く収穫できてしまったことでした」と話すのは会長の大内信一さん。夏の雑草対策に成功したこと、たくさんのにんじんを作ることが可能になったそうです。そのにんじんを使ってつくったジュースの評判はよく、製造するとすぐに売れてしまったそうです。

『まるごとジュース』は添加物を使わないため、にんじんの味がそのままジュースの味となります。そのため、原料となるにんじんづくりに、細心の注意を払っているとのこと。種を撒く時期が少しずれるだけで味が変わり、土づくりも重要です。本場によい味の人参をつくるのは簡単ではないそうです。品種も、収量もあって、味が良く、寒さに強く、貯蔵性に優れているものを選んでいきます。おいしいにんじんをつくるためには、並々ならぬ実践と研究の積み重ねがあります。



8月ににんじんの作付をする畑の前で。メンバーの大内さん(左)と佐藤さん(右)。

2年目の思い
チェルノブイリの事例をから、にんじん、なす、きゅうり、トマトなどはセシウムが移行しにくい作物だと証明されています。2011年度、二本松有機農業研究会でも様々な作物の計測を実施しましたが、先にあげた作物には、ほとんどセシウムの検出はなかったとのこと。「この1年で私たちは農作物がセシウムを吸うメカニズムが徐々にわかってきました。今年は、こうすれば作物がセシウムを吸わないという確信をつかみたいと思っています。作物をつくらなかつたら、いくら知識としてあっても、その成果を信用することはできません。やっぱり実際に自分でやってみないと。福島は汚染され、もう農業はできないと言っているなか、できるかはわからないけれど、やるだけはやってみたい。何年かかるかはわかりませんが、いつか安全な農作物をつくることができると信じています」と大内さんは思いを話してくれました。



にんじんは夏の暑さに弱く、すぐ萎えてしまうので、ジュースを代用して料理するのもオススメです。

『有機人参使用・まるごとジュース』はAPLA SHOPでも取り扱っています。 <http://www.aplashop.jp>



1	2
	3
	4
5	

- 1 — カンボジアでは5月～10月までが雨期。午前中は晴れているが午後3時ごろになるとにわか雨雲がやってきて、どしゃぶりになる。店の前に駐車すると、車から店まで傘のサービスが。
- 2 — オルセーマーケットの靴店。この日は38度。女性はサンダルがほとんど。サンダルを履いている足にはピンクのマニキュアが！
- 3 — 路上にいきなり結婚式場が出現する。新婦の家の前。カンボジアは基本的に母系社会。末娘が家を継ぎ、老親の面倒を見る。
- 4 — このパン窯は薪で焚いている。フランス統治の名残で、フランスパンが生活に浸透している。
- 5 — ホテル入口の水瓶に飾られていく蓮の花。毎朝ボーイさんが新しい花を浮かべる。

(2012年5月撮影)

このコーナーでは皆様の写真を募集しています。

募集内容◎アジアを旅した写真5枚程度(日本も含まず) 詳しくはAPLA/あぶら事務局(TEL:03-5273-8160)までお問い合わせください。皆様からの応募をお待ちしております！

編集後記

90年代初め、世界を分けていた「東」と「西」をいう区分けが消えた。グローバリゼーションの時代に入り、「北」と「南」の区分けが溶けはじめ、21世紀も10年以上をすぎたいま、その区分け自体が意味をもたなくなった。時代を動かす主役が国家から多国籍企業に移り、国境を越えて自在に動く資本に、「北」の人びとも「南」の人びとも同じように振り回される。そして世界は「1%」と「99%」の分かれた。しかし、「99%」の世界もまた支配と被支配、取奪と被取奪が多層に重なり合う。この世界をどうとらえるか。いつか本誌でも考えてみたい。(大野)

2011年11月より開始した福島の子どもたちにバナナを届ける「バナナ募金」。今号では、福島市の保育園や幼稚園とつないでくれた「キッス」の松崎さんに原稿を書いていただいた。先日、私も南相馬市、二本松市、福島市の保育園3ヵ所を訪問し、お話を伺った。皆さん、悩みながらも大変な苦勞をして、なんとか子どもたちを守るうとされている。子どもの成長とは、体と心がバランスよく育たなければならぬことを改めて感じ、原発事故はそうできる環境を子どもたちから奪ったのだ。福島への悲しみや苦しみは依然として日常にある。そういうなかで、私たちは原発再稼働につき進んでいくのか。子どもたちを守れなければ、私たちの未来もないだろう。(吉澤)

毎週金曜の夜に首相官邸前でおこなわれている原発再稼働に対する抗議行動。切実な市民の声を「大きな音」としか認識できない政治家たちに暗澹たる思いを抱きながらも、都合のつく限り参加するようにしています。命をかけて独立のための一票を投じた東ティモールの人々から学んだことは、一人ひとりができる形で「闘う」こと、決して諦めないこと、意思表示そして対話しつづけること。(野川)

ハリーナ HALINA

2012年 vol.02-no.17
2012年08月1日発行

【編集長】
大野和興

【編集者】
吉澤真満子、野川未央

【表紙写真】
長倉徳生

【デザイン・制作】
十年舎

【編集・発行】
特定非営利活動法人 APLA
(APLA/あぷら: Alternative Peoples' Linkage in Asia)

〒169-0072
東京都新宿区大久保2-4-15
サンライズ新宿3F
tel. 03-5273-8160
fax. 03-5273-8667
e-mail info@apla.jp
URL http://www.apla.jp

【印刷】
株式会社セイズ

事務局の動き(2012年5月～7月)	
5月 8日～11日	ネグロスへ出張し、5月9日に行われたカネシゲファーム・ルーラルキャンパスの理事会に秋山が出席しました。
5月 12日	『世界フェアトレード・デー2012』にATJと一緒に参加しました。
5月 14日	取材のため、吉澤と評議員の安藤が、二本松有機農業研究会を訪問しました。
5月 14日	エネルギー勉強会に野川が参加しました。
5月 19日、20日	東ティモール独立10周年記念フェスタ in Tokyoに参加しました。
5月 23日、24日	東ティモールから来日したエゴ・レモスさんが千葉県成田市三里塚を訪問し、野川が同行しました。
5月 26日	第五回APLA総会開催。
6月 9日	「福島百年未来塾」第2回を開催しました。
6月 13日	エネルギー勉強会に吉澤、野川が参加しました。
6月 26日	明治学院大学で、吉澤が授業を行いました。
6月 27日	アユス仏教国際協力ネットワークの総会に野川が参加しました。
7月 2日	パルスシステム埼玉の平和国際委員会・ピース♥インターテマグループの皆さんが事務所を訪問し、活動の説明をしました。
7月 4日	埼玉大学で、吉澤が授業を行いました。
7月 9日、10日	『バナナ基金』の支援先保育園(南相馬市、二本松市、福島市)を秋山、疋田、廣瀬、吉澤が訪問しました。
7月 14日	「福島百年未来塾」第3回を開催しました。
7月 18日	BMW技術協会・若手幹事に吉澤が参加しました。

事務局からお知らせ

以下の呼びかけに賛同・参加しました。

- STOP TPP!!市民アクション 実行委員会団体に参加
- 国連「地球サミット(リオ+20)」の本会議場内で「全世界の脱原発」と「大飯再稼働ストップ」を訴えるデモ【賛同】

フィリピン・ネグロス東州地震被災者支援災害支援募金にご協力ありがとうございました! 募金額全てをフィリピンへ送金しました。

最終募金額募金額: 1,511,050円

「福島の子どもたちに届けよう バナナ募金」へ引き続きご協力をお願いいたします。
福島市の保育園・幼稚園への配達状況は、ホームページでご確認いただけます(23施設、約1700人の子どもたちへ届けています)。

http://www.apla.jp/bnn_bokin/log.html

APLA会員限定のメーリングリストを不定期に流しています。

まだ登録されていない方はぜひ登録してください(事務局までご連絡ください。info@apla.jp)。

Twitter, Facebookで最新の情報をお届けしています。

ぜひ、フォローや「いいね!」をお願いします。

《Twitter》http://twitter.com/_apla_

《Facebook》http://www.facebook.com/apla.jp

From Negros, Philippines [ネグロスより]

カネシゲファーム・ルーラルキャンパス(KF-RC)直売所を開店!

カネシゲファーム・ルーラルキャンパス(KF-RC)を再建してから7月でちょうど3年。養豚を中心に養殖魚や養鶏、そして20種類を超える野菜や果物の生産が軌道に乗り出した。2012年5月、スタッフや研修生たちのかねてからの夢がようやく叶

にはつきものの古着やコーヒー・砂糖・石けんなどの日用品も揃え、買いいもの客が一度に必要なものが揃うように工夫した。
5月10日、お披露目のオープニング式典には、地元ハギメット村の村会議員、小学校の先生たち、農場の野菜をいつも注文してくれる村民たち、オルター・トレード社(ATC)そしてAPLAからは秋山共同代表と総勢50人ほどが参加した。バイス地区のパナ



開所式で買いものをする参加者たち。

って、農場の入り口に直売所を構えることができた。名づけて『バグサカン・農民センター』だ。『バグサカン』とは、山間部の農村で生産物を入びとが集りやすい近くの場所に一旦集めることを意味し、通常は農村の直売所になっている。

5月、直売所のオープン式典が執り行われました

店には、KF-RCの生産物を中心に、近隣の農家からも野菜や芋類を出荷してもらい、フィリピンの田舎の市場
7平方メートルほどの店の前には野菜やバナナ・果物以外に、生簀のティラピア、地鶏、七面鳥、豚肉などが並び、訪問者に美味しい有機豚肉を味わってもらおうとバーベキューを振舞った。日本から寄付された古着には、たくさんのお母さんたちが群がった。KF-RCは2年前から地元

消費者と農民が交流する場

『バグサカン・農民センター』は、地産地消のセンターとして、地元の消費者と農民

分たちの地域に安全で健康な

食べものを生産してくれる農場があることは、子どもたちの将来を考えるうえで本当にありがたい。野菜を食べるだけではなく、これまでも実施してきたKF-RCでの課外授業を継続させてもらい、子どもたちに有機農業、循環農業を体験させたい」と、うれしいメッセージを寄せてくれた。

が直接交流できる場をめざしている。すぐにしおれてしまう葉物などは、少量を展示し、足りなくなれば裏の畑から直接収穫してもらおう。いつも面白がってお客さんが収穫していく。養殖魚もしかり。売れ残ってはもったいないので、生簀にし、地鶏も生きたまま販売する。客は買いいものが済んでもすぐには帰らず、村の情報やたわいのない話をひとしきり済ませてから、ようやく腰をあげる。もっぱらその相手をしているのは、ハリーナ読者には馴染みのバラ

ゴン生産者協会(BGA)出身のチータ・タカタ。彼女はKF-RCでは販売を担当し、現在はバグサカンを1人で切り盛りしている。

直売所を開設してから、農場の野菜やバナナを使って村でおかず屋さんを始めた主婦が売りにきたり、村の大王が農場の竹を仕入れてベッドや箆箭を作って直売所で見本を展示するなど、思わぬところで、地域の人びとの生業と新しく結びつくことができた。

「わざわざ遠い街に売りに行かなくても、毎日知っている顔の人たちが買いにきてくれるのはありがたい。村の人たちが毎日食べる野菜を途切れることなく作ることが大切だとわかった。直売所から、青梗菜と大根が足りないから持って来て! という連絡が入る時はうれしくなる。仕事のやりがいがあるね」。

スタッフも研修生もさらに忙しくなったが、この新しい出来事にワクワクする毎日のようだ。(APLAフィリピンデスク: 大橋成子) ■